

## ベレーシート

●イエシュアが弟子たちにこのように祈りなさい(ギリシア語原文では「祈り続けなさい」〔現在形・中態の命令〕)と教えられた「主の祈り」、その最初の呼びかけである「天にいます私たちの父」について、ここでは、「私たちの」という部分を「わたしの」としてみたいと思います。というのは、この祈りは御子イエシュア自身がこの地上で繰り返し祈られた祈りであったからです。

●「天にいます私たちの父よ」という部分の「私たちの」という部分はきわめて重要ですが、今回はそのことには触れず、弟子たちに教えたこの祈りは、イエシュアが常に祈っていた祈りであるという前提を重要視しています。イエシュアが祈っていなかったことを弟子たちに教えたとは思われません。とすれば、その祈りの意味はどういうことであったのかを考察しています。「私たちの」とは、イエシュアもそこに入ってはじめて意味を持つてくるはずで、イエシュアはイスラエルの民を代表している存在であるがゆえに、「わたしの父」と呼ぶことはなんら問題ないと思います。福音書の中には34回も神のことを「わたしの父」と言っています。そのイエシュアが弟子たちに教えたのが、この「主の祈り」と言われるものです。

●今回は、特に、「天にいますわたしの父」という呼びかけの中に、なぜ「父」なのか、なぜ神が「父」と呼ばれるか、この呼びかけをヘブリス的視点からミドラッシュしたいと思います。ミドラッシュ(MDRSH No.1)では、「父」というヘブル語「アーヴ」(אב)に集中します。「天」を意味する「シャーマイム」(שמים)は、MDRSH No.2の「御名」を意味する「シェメハー」(שְׁמֵהָרַב)と関連づけて扱いたいと思います。

## 1. ヘブル語の「アーヴ」に隠された秘密

●「天」と「父」ということばに対応していることばは、「地」と「子」です。「地」と「子」を意味する語彙がなくとも、「天」と「父」という語彙の中に、「地」と「子」が示唆されています。地のない天はなく、子のない父はあり得ないからです。したがって、「天にいますわたしの父」という呼びかけは、本来、天におられた方が、父によって天から地に遣わされた子、すなわち「子」であるイエシュアが祈り続けていた祈りだと言えます。そして、「子」であるイエシュアが祈っているその祈りの中に、神ご自身のいっさいのもの(創造とその目的、救いとそのご計画)が秘められていると信じます。

●なぜ、イエシュアは「神」を「父」と読んだのか。ヘブル語で「父」は「アーヴ」(אב)です。ちなみに、「わたしの父」は「アーヴィ」(אבי)、**「私たちの父」は「アーヴィヌー」(אבֵינו)**となりますが、なぜ神が「父」(アーヴ)として表わされるのでしょうか。その秘密は、ヘブル文字の中に隠されています。



●「アーレフ」(א)と「ベート」(ב)の二つの文字が組み合わされているヘブル語の「父」(アーヴ אב)に秘密があるように思います。それはどういうことかと言えば、「アーレフ・ベート」はヘブル

語の最初と次に来る文字です。「アーレフ」は「牛」の意味で、「力」を表わします。あるいは、「すべての事柄の本源」とも言えます。「アーレフ」は目には見えない本源的実体です。何らかの媒体がなければその存在を見ることのできない力ある実体です。そのことが「ベート」の文字を必要としているように思います。

●「ベート」の文字は「家」(בֵּית)の頭文字を表わしますが、同時に、この文字は「子」を意味する「ベーン」(בֵּן)、あるいは「息子」を意味する「バル」(בַּר)の頭文字です。「長子」もヘブル語では「ベホール」(בְּכוֹר)です。つまり、本源である父「アーヴ」(אָב)は、「子」「息子」「長子」によって、「家」において、はじめてその実体を現わされる方であると言えます。

●さらに興味深いことには、「ベート」の文字 ב が前置詞(בְּ)で用いられると、「(はじめ)に」「~によって」「~と共に」というように、時やかかわりの方法や共働者を意味します。しかもそこにはゆるぎない「信頼」が存在しています。そしてこの「信頼」を意味する動詞が「バータハ」(בָּטַח)です。名詞は「ベタハ」(בְּטָח)です。なんと、すべてにおいてベートの文字(ב)があります。

●使徒ヨハネは、御子イシュアのことを「ことば」(ロゴス)という概念で表わしました。そして「ことばは神と共にあった」と記しています(ヨハネの福音書 1:1)。この「共に」という表現にはギリシア語の前置詞「プロス」(προς)が使われており、それは「互いに向かい合っている信頼の関係」を表わしています。そして、ヨハネ 1章 18節では、「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされた」と表現しています。だれも見つけない神を父の秘密を知っておられる御子が、人となって来られ(בּוֹא)、私たちの間(中)に(「ベーン」 בֵּן)生まれ、御父のみこころを語り、そしてご計画を成し遂げられたのです。そのことを正しく知ることが聖書の教える「悟り」(「ビーナー」 בִּינָה)です。※ここに使われているヘブル語の頭文字がすべて(ב)であることに注目してください。

## 2. 「御父」と「御子」のかかわり

### (1) 家を建てる「御父」と「御子」

בְּרֵאשִׁית בָּרָא אֱלֹהִים

●聖書の出だしは、「ベレーシート・バーラー・エローヒーム」です。旧約聖書には「アルファベット詩篇」というすぐれた語法があるにもかかわらず、なぜ、聖書は「アーレフ」でなく、「ベート」の文字から始まっているのでしょうか。それは決して偶然ではなく、奥義です。天と地の創造は、「アーレフ」(א)によって信任された「ベーン」、すなわち、御子によってなされたからです。御子が天にある「家」(ベート)を地にまで広げられ、天地という「家」を創造されたのです。天の父は御子にすべての権限を託して、天と地の創造をまかせました。ちなみに、「創造する」と訳された「バーラー」(בָּרָא)は、少しの例外(たとえば、ヨシヤ記 17:18 の「切り開く」)を除けば、ほとんど神にしか使われない動詞です。このことばも(ב)から始まる単語です。

コロサイ書 1 章 16～18 節【新改訳改訂第 3 版】

16 万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。

17 御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。

18 また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。

●このように「御父」と「御子」とは互いを必要とし、永遠に信頼し合って存在しているのです。御父は、御子によって世界を創りました。天と地における「万物」「見えるものも見えないもの」「天と地にあるすべて」は、御子によって存在している「ひとつの家」なのです。その家の中に、神のみこころ、創造、墮罪、救い、福音、御国、統治、王座、御国、栄光、シャーロームといった事柄のすべてがあるのです。回復のみわざも、創造のわざをゆだねられた御子によってなされます。

●そのような御子が 12 歳になられたとき、巡礼先のエルサレムで両親とはぐれてしまいました。はぐれたとしても、イエシュアはそのままエルサレムに残り、宮の中で律法の教師たちと問答しておられたのですが、迷子になってしまったと思った両親は心配して捜し回り、三日後、エルサレムに引き返して、宮の中にいるイエシュアを見つけました。そんな両親に対してイエシュアはこう言いました。「どうしてわたしをお捜しになったのですか。わたしは必ず自分の父の家にいることを、ご存じなかったのですか。」(ルカ 2:50)と。両親ともこのイエシュアの言ったことが理解できなかったようです。天から遣わされた御子イエシュアは地上においても父の家に行ったのです。

●御子イエシュアこそ、天にある永遠の家(父と子が住む家)の本体を、天地を創造し、地上に人(男と女)を造ることによって、天にある本体の写しを造られました。創造当初、天と地は一つであったのです。墮罪によって天と地を一つにしている「エハード」(אֶרֶץ)は破られてしまいました。そのために、神は回復のためのご計画を立てられました。その目的は、再び、天にあるものと地にあるものすべてを、御子イエシュア・マシーアツハ(イエス・キリスト)によって一つ(「エハード」אֶרֶץ)にすることでした(エペソ 1:10)。

エペソ書 1 章 10 節【新改訳改訂第 3 版】

「時がついに満ちて、実現します。いっさいのものがキリストにあって、天にあるもの地にあるものがこの方において、一つに集められるのです。」

●「バート」が意味する「家」という概念には、地上にある「神の家」「神の子孫」「主の幕屋」「主の宮」「神殿」「主にある私たちの体」「主の民」「イスラエル」のすべてが含まれ、それらは天にある「家」の写しと言えます。その「家」に住むことが救いであり、救われて神の子となった者はみな神の家における特権と祝福を味わうことが出来るのです。これらすべては、父が「アーヴ」(אָב)であることに秘められているのです。

●御子イエシュアが遣われたこの地上で、天におられる方に向かって「父よ」と呼びかけているのは、そこに壮大な神の使命があり、父と子の住む家と地の家との回復のご計画が隠されているからです。使徒パウロはこのプロセスを「すべてのことが、神から発し、神によって成り、神へと至る」と表現しています(ローマ 11:36)。

## (2) 家を建てる「御父と御子」の写しとしてのモデル

●天における「御父」と「御子」の信頼のかかわりとそのみこころを、私たちは地上の御子イエシュアを通して見ることができるのです。そうしたかかわりを地上で写し出された他の例として、アブラハムとイサク、またダビデとソロモンを挙げることができます。アブラハムとイサク、ダビデとソロモンに見られる「父と子」のかかわりは、御父と御子のかかわりの型(写し)です。以下に、そのことを簡単に触れてみたいと思います。

### 例 1ー「アブラハムとイサク」

●創世記 22 章 6 節と 8 節には、「ふたりはいっしょに進んで行った」(6 節)、「ふたりはいっしょに歩き続けた」(8 節)とあります(原文ではいずれも同じ表現ですが、訳文では変わっています)。父と子のふたりは常にいっしょに歩き続けた(ハーラフ)ことが強調されています。父と子がゆるぎない信頼で結ばれています。父アブラハムの神への信頼、子であるイサクの父アブラハムに対する信頼がテストされた出来事が 22 章でした。父アブラハムは、約束された子イサクにすべてを与え、子であるイサクは父アブラハムからすべて(家長の権威、家の財産、神の約束のすべてを)を受けています。ここには「天における御父と御子の麗しい信頼の写し」があります。

### 例 2ー「ダビデとソロモン」

●ダビデの「主の家(宮)を建てたい」という強い思いは、子ソロモンによって実現します。I 歴代誌 22 章 5 節にはダビデが子ソロモンに語ったことばが記されています。

5 ダビデは言った。「わが子ソロモンは、まだ若く力もない。【主】のために建てる宮は、全地の名となり栄えとなるように大いなるものとしなければならない。それで私は、そのために用意しておく。」

●家(ベート)において、父は家のリーダーであり、力と知恵をもって子を導き、教え、その子孫を継続させていく責任を担った存在です。父は子に対して大きな責任をゆだねられています。子は父に従順であることによって、はじめて「家」は建て上って行きます。父と子が共に「家」を建てるということは、天における真理なのです。そこに私たちが招かれています。

●ダビデの主のために宮を建てたいという思いが先行し、その思いがソロモンによって実現することとは別に、神である主とダビデが交わした「ダビデ契約」というものがあります。それは無条件的契約で、「**主がダビデのために一つの家を建てる**」という約束です。ソロモンにゆだねられた主の宮は、やがてソロモンの罪によって二つに分裂して、やがて崩壊します(バビロン捕囚の出来事)。しかし一度、主がダビデに約束された「一つの家を建てる」という約束は、ダビデの子孫から登場するメシアによって実現します。それは未だ実現してはいませんが、必ず、

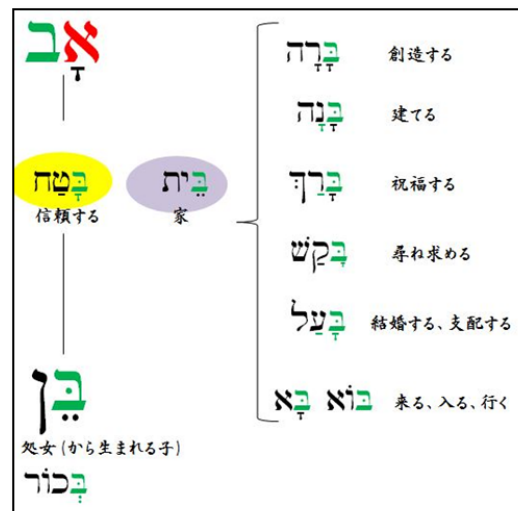
ダビデ的王国がメシアによって実現する時が到来するのです。それは「千年王国」の到来です。エルサレムを中心として、メシアであるイエシュアが全世界を王として統治する時代が、メシアの地上再臨によって実現します。今回、ミドラッシュしようとしている「主の祈り」は、まさにその実現のための祈りだと言えます。神のご計画の全貌を鳥瞰的視点から見る事が出来なければ、「主の祈り」の本来の意味する理解して祈ることはできないという事です。

●そのためにも、私たちは神のご計画の全貌を知ることが出来るように、主に求めていく必要があります。使徒パウロがエペソ教会の長老たちを集めて語った訣別説教の中で、次のように語っています。「私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいた」(使徒 20:27)と。

### 3. 「父」と「子」のかかわりを示すヘブル語の語彙

●父「アーヴ」(אָב)は、長子「ベホール」(בְּכוֹר)である子「ベーン」(בֵּן)、ないし息子「バル」(בַּר)を信頼して(「バータハ」בְּטַח)、家(「ベート」בֵּית)を建てさせました(「バーナー」בְּנָה)。

●すべての者が、処女(「ベトラー」בְּתוּלָה)マリヤから生まれた子(「ベーン」(בֵּן))を尋ね求め(「パーカシュ」בְּקַשׁ)なら、その息子(「バル」(בַּר))を通して、家(「ベート」בֵּית)の中に入る(「ボー」בּוֹא)ことができます。そして主は、私たちに油を注いで(「バーラル」בְּרָל)下さるのです。その油は神の歓迎の喜びとしての油です。またそれは、主からの祝福(「ベラーハー」בְּרָכָה)のしるしです。私たちはこの良い知らせを伝える(「バーサル」בְּשָׂר)責任があります。やがて、花婿なるキリストは結婚する(「バーアル」בְּעַל)ために、花嫁なる私たち(教会)を迎えに来て(「ボー」בּוֹא)くださいます。なぜなら、主はアブラハム、ダビデと結んだ契約(「ベリート」בְּרִית)を必ず果たされる方だからです。



#### まとめ

●「主の祈り」の最初の呼びかけである「父」という言葉の背景に、「父」を呼ぶ「子」の姿があります。「父」は「子」への絶対的信頼をもって全権をゆだね、ご自身のみこころを成し遂げられます。一方、「子」は「父」に対する信頼を十字架の死にまで貫くことによって、死を打ち破り、やがて天と地をひとつにします。なんという「父と子」の永遠の愛の絆でしょうか。「父」と「子」のゆるぎない信頼が、「主の祈り」の最初の呼びかけの中にあることを知らされるのです。

## MDRSH NO.1 の付記 「12」という数に隠された秘密

旧約聖書では

- (1) ヤコブの 12 人の息子たちと、そこから生じるイスラエルの 12 の部族。
- (2) 約束の地の偵察のためにそれぞれの部族から派遣された計 12 人の者たち。
- (3) 荒野の旅の途上のエリムという町で見出された 12 の泉。
- (4) 約束の地に渡って行った最初の宿営の地ギルガルに記念の石として据え置かれた 12 の石。
- (5) 大祭司が着る服の胸に着けるエポデには 12 の部族を表わす宝石が埋め込まれています。
- (6) ダビデは神殿で仕える祭司の組織を 12 の二倍である 24 の組に分けています。

新約聖書でも、この「12」という数は受け継がれます。

- (1) イエスが選んだ 12 人の使徒(弟子)
- (2) イエスが 12 歳の時の出来事—巡礼先のエルサレムで両親とはぐれたことで、わたしは必ず自分の父の家にいるという真理を両親にはじめて明かされた出来事。
- (3) 五千人のパンの給食の奇蹟で、残ったものを集めた時、12 のかごがいっぱいになった出来事。
- (3) 黙示録では、神の御座の回りに 12 を二倍した数の長老たち。額に神の印を押されたイスラエルの 12 部族から各 1 万 2 千人(合計 14 万 4 千人)、「聖なる都」(新しいエルサレム)にある「12 の部族の名前」のみならず、「12 の門」「12 人の御使い」「12 の土台石」「12 の真珠」「12 使徒の名前」、そして「12 種の実」、さらには、「1 万 2 千スタディオン」、「12 の 12 倍の 144 パーキュス」。

●なぜ、これほどまでに、神は「12」にこだわっているのでしょうか。人や部族や物などの「数」、あるいは「長さ」といった単位は異なっても(120 歳という年齢もありました)、12 というのは同じです。とても不思議に感じないでしょうか。感じなければそれでおしまいなのですが、こだわって突っ込んでみると、意外なことに、この数は、12 という数量ではなく、「1」という数と「2」という数の配列に秘密があるように思います。これはあくまでも私のヘブル的視点からの仮説なのですが、ヘブル的視点からの真理の光を求めている者のひとりとして、意外にじっくりくるものがあるのです。

●「父」を意味する「アーヴ」(אָב)が、「アーレフ」(א)と「ベート」(ב)の二つの文字の組み合わせからなっているように、「12」という数字も「1」(א)と「2」(ב)の組み合わせだと考えるならば、なぜ、神が「12」という数にこだわるのかが理解できるように思うのです。つまり「12」という数字は、聖書においては「神の所有とされた民」を表わす象徴的な数であり、御父と御子(神と小羊)との永遠のかかわりの中にあるいのちの保障を表わす数字とも考えられるのです。